

浜松の文芸を継承する頼もしい若者たち

9月に市内の中学校の生徒さんが、浜松の文化を調べるために文芸館を訪れてくれたことは、「いざない」No.4でお知らせしましたが、来館後に生徒さんからお礼状が届きました。その一つをご紹介します。

先日は私たちの学習のために様々なお話をいただきありがとうございました。私たちも、浜松市民でありながら「浜松は音楽のまち」というイメージしか今までは持っていませんでした。しかし、読んだことのある本の作者や知っている歌人の中にも、浜松にゆかりのある方々が多くおられるということで、「文化のまち」としての浜松の豊かさを感じる事が出来ました。

これから私たちは浜松の文化について知ってもらえるようなポスターや地図をつくらうと考えています。私は今回の訪問で、言葉や歌の魅力をまた一つ見つけることが出来ました。それは「誰かとつながってられる」ということです。地図づくりでは少しでも広い世代の方々に素敵な文芸の魅力を感じてもらえるように、今のわくわくする気持ちで頑張ります。

私はこのような思いをもつことができ、本当にうれしいです。貴重な経験をさせて頂けたことに感謝いたします。(M・K)

先日、その学習成果の中間発表会が同校で行われました。私の手元へも生徒さんからの招待状が届いたので参観に行ってきました。半年かけてよく調査し、立派な発表に感心しました。

今後、さらに半年かけて文化施設のマップを作成していくということですが、若い世代が浜松の文化を大切に思い、継承していく意気込みが感じられて、頼もしく思いました。



文芸館の四季

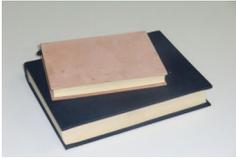
先日、文芸館をよく利用してくださる俳句の先生がギンモクセイのひと枝を持参してくれました。キンモクセイは見慣れている私ですが、ギンモクセイの花は初めてで、その清楚な姿にうっとりしました。キンモクセイとほぼ同じ香りを発していましたが、強さは若干控えめな印象を受けました。キンモクセイより少し遅れて盛りを迎えるあたりにもいじらしさを感じました。

興奮めな話になりますが、「モクセイ」は漢字で「木屋」と書き、動物のサイの字が使われています。木の幹がサイの皮膚に似ているところから来ていると聞きました。



外に目をやると、イチョウの葉がだいぶん黄色味を帯びてきました。「今年もきっと多くの人の目を惹き付けることだろうな」などと、そんな気持ちで木を見上げていると、隣り合って生えているモチノキが、「自分にも目を向けて」といわんばかりに、枝々に赤い小さな実をたわわにつけて、風に任せて小刻みに揺らしては自己アピールをしていました。

イチョウの花言葉は「鎮魂」「長寿」「しとやか」だそうです。(『花言葉事典』より)



浜松文学紀行 4

深奥山方広寺 「大木惇夫詩全集」

奥山の方広寺ぞや、
そびえ立つ堂塔伽藍
仰ぎ見て息を呑みつつ
石の段登りゆきけり。

あな浄し、み寺の域は、
雪散らふ石の段には、
舞ひ落ちし紅葉いく片、
うれしみて拾ひゆきけり。

御堂にはみ燈ゆれて
瓔珞の金に映えつつ、
窓の外は、山のみどりに
寂として雪の降りつつ。

大木惇夫は1895年広島市の生まれ。北原白秋の詩に驚嘆、私淑するようになった。1925年に出版した「風・光・木の葉」の序文に、白秋は「処女詩集にして未だ曾てかくのごとく整斎した名詩集を示し得た人は蓋し稀有であらう」と激賞した。

1941年太平洋戦争が始まると、徴用を受けてジャワに配属された。船が沈没、阿部知二や大宅壮一らと共に海に飛び込み、九死に一生を得た経験もした。

現地出版した「海に歌へる」をはじめ、「雲と椰子」「豊旗雲」等の戦争詩は、前線の兵士や多くの日本国民に愛誦された。

しかし、過労で心身を損ね、戦争末期福島県の山村で養生した。戦後は、戦争時の詩によって戦争協力者として文壇、マスコミから徹底的に無視、疎外された。

死の8年前の昭和44年、「大木惇夫詩全集」が刊行された。解説を担当した保田與重郎は、

私は三巻の詩全集をよんで、その詩境詞藻の多彩さと清らかな魂の深層の
にほひにふれて、これは大なる白秋よりなほも豊饒と思つたほどである。

と絶賛した。この詩人が1964年12月15日の夜、猪鼻湖畔に建つ琴水楼に宿泊。早朝の浜名湖畔に立って、「曙の雲行き早く 目ざめたり、今日の浜名湖、いつしかにめぐりの山も 片明り、片陰りつつ、緑なる引佐峠と 館山と相呼び応え」で始まる「雪の浜名湖」の詩を残した。

朝食後、地元出身の国際ジャーナリストで評論家の松尾邦之助、「消えた矢惣次」の時代小説作家加賀淳子、地元在住の郷土史家近藤用一の三人と共に、自動車で風越峠と瓶割峠の山越えの道を通って奥山に向かった。

山風は吹きも起これり、
風花は舞ひて散らへり、
齒朶の雪、枯れしすすきを
見て登る風越峠

三人がどういう経緯で惇夫に同行したかは不明だが、翻訳家仲間の邦之助が取り持った可能性が高い。

「奥山の半僧坊」の名で知られる臨済宗方広寺派の大本山方広寺は、井伊氏の一族奥山朝藤の招きで、無文禅師が1371年に創建した古刹である。

引用した「深奥山方広寺」の詩には、その日の寺の様子が的確かつ抒情豊かに描写されている。住職に「御酒をもたびて、一二夜泊まりてゆけ」と勧められたが、宿泊したかどうか。この時惇夫69歳であった。